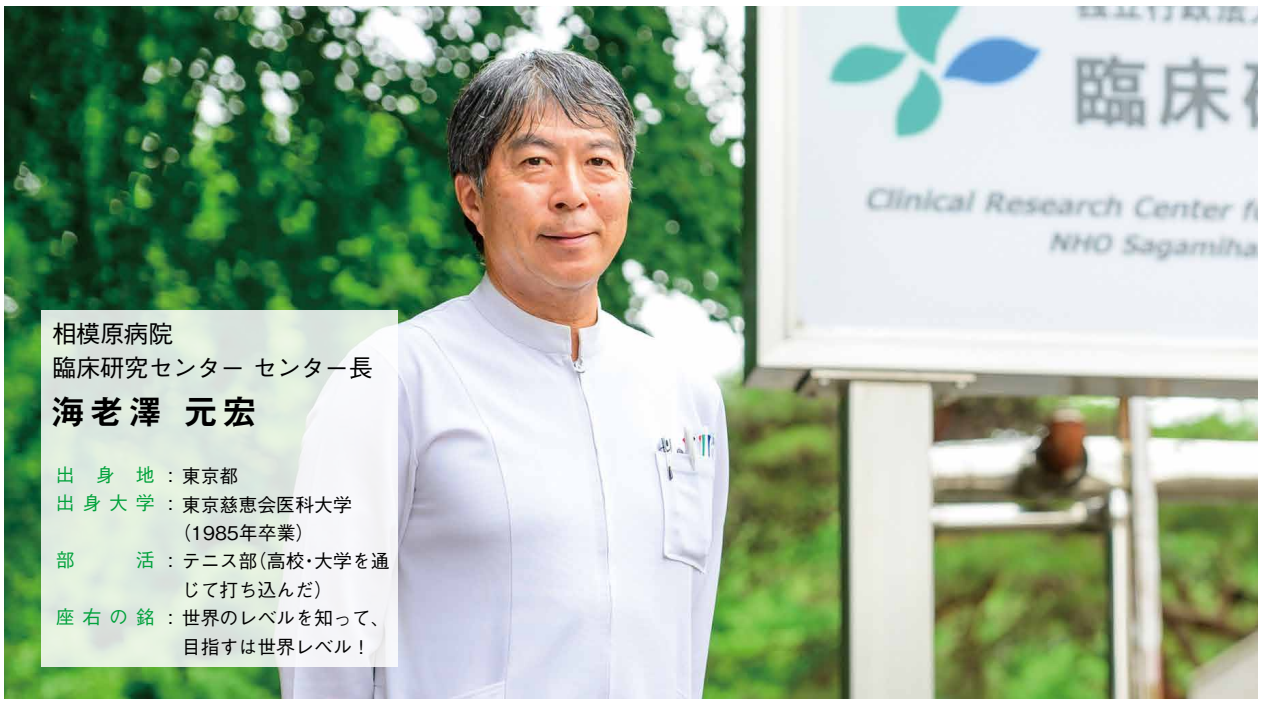
NHO × DEEP FIELD

医療のコアを担うスペシャリストたち



相模原病院
臨床研究センター センター長
海老澤 元宏

出　身　地：東京都
出身大学：東京慈恵会医科大学（1985年卒業）
部　　活：テニス部（高校・大学を通じて打ち込んだ）
座右の銘：世界のレベルを知って、目指すは世界レベル！

医療の世界には、深く潜れば潜るほど広がるフィールドがあります。一つの領域を探究し続け、新たな知見を生み出し、診療や研究を通じて日本の医療を前進させる――。NHOには、そんな挑戦を続けるスペシャリストたちが数多く活躍しています。
本連載「DEEP FIELD」では、最前線で活躍する医師たちへのインタビューを通じて、その専門領域の魅力と可能性、そして挑戦の軌跡を紹介します。第1回は、国民の多くが悩まされる「アレルギー」をテーマに、世界のアレルギー医療・研究を牽引する相模原病院臨床研究センター長の海老澤元宏先生にお話を伺いました。

DEEP FIELD

アレルギー領域

未開拓のフィールドにこそ、医師の醍醐味がある

国立病院機構 相模原病院
臨床研究センター センター長 **海老澤 元宏**



患者であり、研究者であり――アレルギーに導かれた道

私がアレルギーの道に進んだのは、いくつかの偶然が重なった結果でした。医学部の最終学年で、脳神経外科に行くか、アレルギー免疫系に進むか迷っていた頃、恩師となる飯倉洋治先生に出会いました。お寿司屋さんの奥座敷で「お前を世界のスターにしてやる」と口説かれ、その場で進路を決めてしまったのです。今思えば見事に乗せられたわけですが、ほかの先生からはなかなか言われない一言でした。

そもそも私自身が、幼い頃から喘息とアトピー性皮膚炎、卵アレルギーを抱える「当事者」でした。喘息発作で幼稚園に半分も通えず、苦しくて夜中に往診の先生を呼んだこともあります。アドレナリンの注射が劇的に効いた、あの感覚は今でも覚えています。また、1980年代は免疫学が飛躍的に発展した時期で、その面白さに学生として魅了されていたことも大きいです。興味と当事者性、そして恩師との出会い。この三つが私をアレルギーへと導きました。

全身を診る面白さ、時代とともに変わる疾患

アレルギーは、感染症に匹敵するほどありふれた病気でありながら、軽症から命に関わる重症まで幅が広い。しかも小児科をベースにすると、喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、鼻炎、結膜炎、アナフィラキシーと、実に多彩な疾患を横断的に学べます。臓器別に分かれてしまう成人領域とは違い、全身を俯瞰できるのが醍醐味です。

興味深いのは、時代とともに疾患の構造が移り変わってきたことです。かつて中心だった喘息から、アトピー性皮膚炎、そして食物アレルギーへ。近年はくるみやカシューナッツといったナッツ類のアレルギーが急増しています。耳鼻咽喉科や呼吸器内科の先生と連携するうち、副鼻腔炎が喘息に影響する「ワンエアウェイ」の考え方を学ぶなど、他科との交わりが私自身の視野を広げてくれました。

一銭にもならない仕事を信念で続けた31年

若い人に伝えたいのは、すでに確立された領域を究めるのも一つですが「どうにもなっていない病気」を耕していくのは、本当に面白い仕事だということです。

1980年代、食物アレルギーは実在するかどうかすら論争の的でした。診断基準もガイドラインもなく、医師によって方針がバラバラで、振り回されるのは患者さんです。私は留学先のジョンズ・ホプキンス大学で食物経口負荷試験を学び、これを日本に持ち帰りました。帰国から診療報酬化が実現する2006年まで、実に13年。診療報酬がつかず、一銭にもならない中で症例を積み重ね、データで必要性を示し続けました。

相模原病院でも、食物アレルギー診療は私一人で始めました。着任当時は小児科医が4人だけ。一般診療も当直もこなしながら、春休みと夏休みに無報酬で負荷試験を続けたのです。それが31年を経て、今では約20人体制、DPC症例数は全国一位になりました。立地は決して良くありませんが、北海道や九州、沖縄から飛行機で来てくださる患者さんもいる。信念を持って続け、情報を発信し、ひたすら患者さんのために――その積み重ねの結果だと思っています。

世界を目指すなら まず一歩を踏み出してほしい

臨床に軸足を置きながら研究も続ける「二刀流」は、臨床病院では稀かもしれません。けれど、世界に出ていくためには研究が欠かせない。私は患者さんの血清を保存し、2005年から患者情報のデータベース化を進め、海外の研究者との共同研究につなげてきました。NHOの臨床研究センターがあるお陰です。

世界で活躍するなら、英語は絶対条件です。使わざるを得ない環境に身を置くこと。私自身、中学時代に家へ来たスイス人留学生との会話や、ロンドン大学への留学が転機になりました。学術発表よりも、実は夜の懇親の場での雑談のほうがずっと難しいのです。歴史も政治も文化も、英語で語れる教養が問われます。日本は素晴らしい研究をしているのに、発信力が弱いので損をしています。だからこそ若い皆さんには、思ったことをその場で口にする度胸を持ってほしいのです。

未開拓のフィールドは、まだいくらでも残されています。ぜひ、その一歩を踏み出してください。

Q 他科との連携で、印象に残っていることは？

A 成人で咳が長引くと、すぐ「咳喘息」と診断され吸入ステロイド、合剤さらに経口ステロイドでも効かず、相談を受けて「それは副鼻腔炎では」とお伝えすると、一気に解決することがあります。鼻と肺はつながっている――この「ワンエアウェイ」の視点は、耳鼻咽喉科と呼吸器内科の境界に見落とされがちなのです。

Q これからアレルギー領域はどう変わっていきますか？

A 疾患の構造は20～30年で大きく変わります。かつて生死に関わった喘息も、吸入ステロイドや分子標的薬の登場で、今や外来で管理できる病気になりました。しかし、アナフィラキシーなどまだ手のつけられていないテーマがたくさんあります。だからこそ、未開拓の領域に挑む面白さは尽きません。



連載特集

医師を支えるメディカルスタッフたち

医師の働き方改革が進む今、質の高い医療を持続可能な形で提供していくためには、医師の業務を適切に見直し、多職種がそれぞれの専門性を活かしながら協働していくことが重要です。
国立病院機構では、他職種へのタスク・シフト／シェアを推進し、医療の質を支えるとともに、職員一人ひとりが専門性を発揮し、働きやすい環境づくりを目指しています。
本特集では、特定行為研修修了看護師・診療看護師（JNP）、ソーシャルワーカー（SW）、臨床検査技師・診療放射線技師、文書支援係にフォーカス。それぞれの専門職としての役割や実践、医師との連携のあり方、そして現場で働く職員の思いをお届けします。

■ 特定行為看護師・診療看護師（JNP）とは

特定行為看護師は、特定行為研修を修了し、医師があらかじめ作成した手順書に基づいて診療の補助を行う看護師です。特定行為は21区分38行為からなり、人工呼吸器の設定変更や動脈血液ガス採血、胃ろうカテーテル交換などが含まれます。特定行為看護師は必要な区分を選択して研修を受講するのに対し、診療看護師（JNP）は大学院修士課程で診療能力を体系的に学び、多くの教育課程では特定行為38行為を包括的に修得します。東京医療センターでは、JNPを2013年から、特定行為看護師を2021年から導入し、医師・看護師をはじめとする多職種と連携しながら、質の高い医療の提供に貢献しています。



MEDICAL STAFF_01

特定行為研修修了看護師

東京医療センター
ハイケアユニット病棟 副看護師長
島元 美和子

出　身　地：鹿児島県
部　　活：日本舞踊部・弓道部・チアダンス部
座 右 の 銘：目の前の人を大切にする

医師のパートナーとして質の高い診療を支援する

特定行為には21区分38行為ありますが、東京医療センターでは2020年から外科系基本領域パッケージに含まれる7つの特定行為研修を開講しています。

特定行為看護師は、看護師として患者さんの傍に寄り添いながら、より深い病態理解と臨床推論に基づき、必要な医療を迅速に提供する役割を担っています。当院では、外科領域における皮下ドレーン・中心静脈カテーテルの抜去や直接動脈穿刺、褥瘡処置、そしてクリティカル領域（救命病棟、ICU、HCU）における直接動脈穿刺や中心静脈カテーテル抜去などの特定行為を実施しています。また、所属病棟にとどまらず、院内迅速対応チーム（RRT）や術後疼痛管理チーム（APS）の一員として、多職種と連携しながら組織横断的な活動にも取り組んでいます。

特定行為看護師は、患者さんの最も近くでケアを行う看護師だからこそ、病態の変化やわずかな異変を早期に捉え、迅速な対応につなげることができます。手術や処置などで先生方がすぐに対応できない場面においても、診療に必要な情報を整理したり、患者さんにとって不要となったドレーンやカテーテルなどの医療デバイスを適切なタイミングで抜去したりするなど、安全で負担の少ない医療の提供につなげられるよう努めています。

診療を支え、多職種をつなぎより良い医療へ導く

特定行為看護師の役割は、処置を行うことだけではありません。病棟では相談役として、スタッフへの指導や支援にも関わっています。患者さんの状態や治療方針についてスタッフが悩んでいる際には、医師へ相談すべき内容を整理したり、多職種間の情報共有を円滑に進めたりすることで、チーム全体が同じ方向を向いて患者さんを支えられるよう意識しています。

また、特定行為看護師は患者さんやご家族と医療者の間をつなぐ役割を担うこともあります。複雑な経過をたどる患者さんでは、情報をしっかりと整理し、双方の思いや考えを共有しながら、より良い医療の提供につながるよう支援しています。

先生方が診療に集中できるために

特定行為研修を修了できたのも、先生方のご指導やご協力があったからこそです。研修で得た知識や技術を現場へ還元し、先生方が診療に集中できる環境づくりに少しでも貢献したいと考えています。「処置をお願いできて助かった」「必要な情報がそろった状態で診療に入ることができた」と声をかけていただけることは、私たちにとって大きな励みです。

特定行為研修修了者は、看護師としての視点を持ちながら、より深く病態を捉え、患者さんに必要な医療を適切なタイミングで届ける存在です。先生方が診療に専念できる環境づくりに貢献するとともに、安心して相談できる身近なパートナーとして役割を果たしていきたいと思います。

